17. 豊後高田市における新規放牧者の育成

北部振興局
○夏迫紗綾・石本歩

１　はじめに

豊後高田市では、かつては盛んに行われていたみかん栽培も価格低下や高齢化により廃業が進み、耕作放棄地が増え、荒れ地や鳥獣被害が増加していた。このような中、荒廃農地の解消を目的に県の「レンタカウ制度」を活用して 2005 年に放牧を開始したＡ牧場が、その継続した取り組みにより荒廃農地の解消に効果を上げただけでなく、親子周年放牧体系を確立し、放牧による肉用牛繁殖経営の成功事例として県内外に広く知られる存在となった。

こうしたことから、豊後高田市では新規就農者育成のための研修制度「アグリチャレンジスクール」（以下、「ACS」という。）の品目に「放牧」を加え、新規放牧者の育成に取り組んできた。

そこで、これまでの取組みに対する当局の関わりと併せ、今後の課題について報告する。

２　これまでの取組み

（１）ACS 研修期間中の支援

ア　ACS 研修に関して

研修は最大 2 年間受講することが可能で「座学による講義」と「研修農家での実習」により、就農に必要な「知識」と「ノウハウ」を学ぶことができるようになっており、研修農家には A 牧場が選定されている。

当局では、この研修期間中に月に 1 度、市と共に研修農家である A 牧場を訪問し、研修における課題や不安点、要望などを研修生から聞き取ってきた。

また、座学による講義での講師も務め、「子牛の飼養管理」や「繁殖の基礎」など繁殖経営を行う上で必要な技術や知識の習得に繋がる講義を行ってきた。

加えて、肥育農家が求める子牛について学んでもらうため、今年度は肥育農家への農外研修を企画した。

イ　就農地の選定に関して

ACS の研修生（以下、「研修生」とういう。）は研修期間中に就農地を見つけなければならないが、市が奔走して候補地探しを行ってくれているため、無事に研修を終えるまでに就農地を確保できている。当局では候補地が放牧経営を行う上で問題がないかを選定の際にアドバイスを行ってきた。

ウ　牛舎整備に関して

研修生は研修終了後すぐに経営が始められるように、就農地を確保出来れば、自家施行により牛舎整備を始めるので、作業動線を考えた使いやすい牛舎となるように参考となる事例を紹介するなど、構造上のアドバイスを行ってきた。

（２）就農後の支援

ア　放牧地の管理に関して

就農地の多くは耕作放棄地のため有害雑草が多く、採食可能な草の量が不安定なため、牛が栄養不足になり、分娩事故や繁殖障害を起こす恐れがある。

そこで、当局では牧養力を高めることを目的に、バヒアグラスによる草地化のほか、イタリアンライグラスの追い播きなどを指導した。

また、セイタカアワダチソウやワラビが繁茂していては播種した牧草も定着しないので、頻繁な掃除刈りや石灰散布による土壌改良など牧草が生育しやすい環境づくりについても指導した。

イ　繁殖管理に関して

繁殖管理は経営に直結する重要な課題であるので、当局では宇佐家畜保健衛生所の繁殖巡回に同行して新規放牧農家の繁殖状況を確認するほか、入手した情報をもとに繁殖クラウド型管理システムの Moopad や当局で作成した繁殖管理プログラムにより繁殖台帳を整備して関係機関と共有し、繁殖成績の改善指導に役立ててきた。

ウ　子牛管理に関して

新規放牧農家は研修農家にならい、親子周年放牧を行うことが多く、子牛市場まで離乳しない農家もあったため、子牛の発育は思わしくない状況であった。

子牛の市場出荷成績（去勢）

出荷者	平均日齢体重（kg）
B 牧場	0.91
C 牧場	0.99
北部管内平均	1.10

そこで、当局では低コスト・省力化という放牧のメリットを活かしながら、子牛の発育改善を図るため、牧線の張り方を工夫して哺乳子牛だけが入ることのできるスペースを作り、哺乳子牛専用の餌場を設置するように指導した。

また、親子分離を行うことなく、低コストで省力的に適期離乳を行うため、離乳用の鼻環の使用を推進した。

加えて、子牛の発育状況を把握するために、2 ヶ月に 1 回の頻度で定期体測を行ってきた。

３　取組みの成果

（１）新規放牧者の増加

ACS 研修と研修期間中における市や県の支援により、これまでに 6 名が放牧経営を開始している。

（２）冬場の分娩事故の減少

放牧地管理の指導により、放牧地の牧養力が高まったことで、経営開始当初に多発した新規放牧者の冬場の分娩事故が大きく減少した。

（３）子牛の発育改善

哺乳子牛専用の餌場の設置により離乳子牛や親牛による哺乳子牛用飼料の盗食がなくなったこと、離乳用鼻環により離乳時期が早まったことで、子牛の飼料摂取量が増加して、子牛の発育が改善し、市場出荷体重が大きくなった。

また、定期体測を実施したことで、飼養者が子牛の発育を数値で実感できたため、子牛の管理方法を見直すきっかけとなった。

B 牧場：子牛市場出荷成績平均（去勢）

出荷年	体重（kg）	日齢体重（kg/日）
2018.1-12	227	0.85
2019.1-12	242	0.91
2020.1-10	262	0.94

（４）水田放牧への取組み

新規放牧者の取組みが知られるようになると、共同で牛を購入して、高齢化で維持が難しくなった農地の景観を保つために、水田放牧に取組む方も現れた。

（５）肉用牛頭数の増加

新規放牧者の増加や放牧の取組みの拡大により、豊後高田市における肉用牛繁殖雌牛の頭数が大幅に増加した。

豊後高田市における繁殖雌牛飼養状況

	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年
総飼養頭数	174	229	248	338
うち、放牧者	112	185	212	270
うち、新規放牧者	8	22	28	68

４　今後の課題と展望

（１）農家個々の課題

いずれの牧場も経営開始後間がないので、今後、安定的な収益が得られる経営を確立していくためには、経営が成り立つ規模への計画的な増頭と併せ、飼養管理技術の向上を図って市場性の高い発育良好な子牛づくりを行っていく必要がある。

（２）地域の課題

現在、豊後高田市には繁殖雌牛の組織がない状況である。しかしながら、豊後高田市では近年、肉用牛繁殖雌牛の飼養頭数が著しく増加しているので、放牧者を中心に組織を作って農家どうしが研鑽し、産地としての地位確立に取組んでいく必要がある。

（３）新たな担い手確保

新規放牧者の取組みにより、豊後高田市では放牧への関心が高まりつつある。しかしながら、放牧に対する理解が十分に深まったとは言えないため、就農に必要な土地の確保が難しい状況である。

新規放牧者の成功により、今後も豊後高田市で新たに放牧に取組みたいという希望

者が現れると思われるので、放牧に対する地域の理解を深め、土地を確保しやすい環境づくりに取組んでいく必要がある。